

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 柴田 葵

本論文は、20世紀半ばにオーストリアで始まった彫刻シンポジウム (Bildhauersymposion) と呼ばれる芸術運動がいかに関西に日本に伝わり、展開し、変容して今日の芸術状況 (たとえば都市を彫刻で装飾するという文化行政) につながっているのかを明らかにしたものである。これだけでも未開拓の領域に挑んだ研究として有意義であるが、著者の姿勢はひとつの芸術運動の歴史的な推移を追いかけるに止まらず、サブタイトルに「芸術家の共同体と彫刻の社会化の観点から」とうたったとおり、芸術と社会の望ましい関係を問う意図を強く有している。

なぜなら、複数の彫刻家による野外制作と共同生活が不可分のかたちで始まった彫刻シンポジウムは、密室での個人制作と美術館での鑑賞行為に収斂していた20世紀の芸術の在り方を根底から問い直す企てであったからだ。こうした視野の中に当該シンポジウムをとらえる大きな問題設定が本論文を特徴づけ、類例のない独創的な研究としている。共同生活がかたちを変えて、今日のアーティスト・イン・レジデンスにつながるという分析など随所に説得力がある。

本論文は1950年代の彫刻シンポジウムから50年後のアート・プロジェクトまで射程に収めた全10章に、2本の付論「日本のアート・プロジェクト (1990-2017)」と「アーカイブズとドキュメンテーション：芸術活動の記録と記憶」、さらに資料編「日本の彫刻シンポジウムデータベース」と「主要なオーガナイザーの年譜」を加えて大部なものとなった。

本論文の起点は、1959年にオーストリアのザンクト・マルガレーテンの石切り場で開かれた彫刻シンポジウムである。ウィーンの彫刻家カール・プラントルが野外制作と共同生活という方針を定め、11人の彫刻家が3ヶ月にわたって参加した。著者は塑造中心の近代彫刻に対し彫を石切り場で作ることの歴史的意義を説き、本論文の扱う一連の芸術活動がスタイルを変えつつも、野外制作と野外展示によって支えられていることの社会的意義を明らかにした。

わずか4年後の1963年には、神奈川県真鶴半島で日本最初の彫刻シンポジウムが開かれた。翌年の東京オリンピックを見据えた催しであったこと、都市空間と彫刻の関係の新たな構築が求められたことなど、同シンポジウムをめぐる諸問題の解明は本論文の白眉である。関係者への丁寧な取材も本論文の資料的な価値を高めている。

日本への限定、西ヨーロッパやアメリカの動向が視野の外に置かれたことなど議論が十分に尽くされていない面もあるが、もたらされた成果の大きさと比較すれば大きな瑕疵とは言い難い。以上をふまえ、本審査委員会は本論文を、博士 (文学) の学位を授与するにふさわしい論文であると認定するものである。